

# 伝説研究と菅江真澄

— 柳田國男『山島民譚集（一）』をめぐって —

小堀 光夫

## 一 はじめに

柳田國男の『山島民譚集（一）』は、大正三年（一九一四）七月四日に甲寅叢書第三篇として甲寅叢書刊行所から刊行された。全体の構成は、「小序」「河童駒引」「馬蹄石」「目次」からなり、その民譚資料は、地誌、郷土史誌類、隨筆、日記、紀行、書簡等の文献資料からの引用である。

これは『東京朝日新聞』を通じて集めた同時代の人々からの報告を元に伝説集を編んだ高木敏雄の『日本傳説集』大正二年（一九一三）とは明らかに異なった内容となっている。

『山島民譚集（一）』には、以下（二）～（八）の續刊豫告と、紹介文「一名日本傳説十七種、諸國の田舎に行はる、傳説口碑の内特に意味深き數種に付比較攻究を試みたるもの、第一巻には河童と馬蹄石の二篇を録す」が示されている。「甲寅叢書書目」には、その第十篇として、『山島民譚集（一）』を予告していたが、

柳田の生前には、ついに刊行されることはなかった。しかし『山島民譚集（一）』は、その後の日本の伝説研究に大きな方向付けを行った著作であることは確かである。

『山島民譚集（一）』に取上げられた伝説資料に菅江真澄の著作からの引用があることは注意すべきことである。以後、真澄の著作は、柳田の伝説研究の資料として採用されている。例えば『山島民譚集（一）』以降、『日本の伝説』『一目小僧その他』『おとら狐の話』『史料としての伝説』『山の人生』『伝説』『木思石語』『神を助けた話』『夜啼石の話』『木綿以前の事』『妹の力』『桃太郎の誕生』『巫女考』『矢立杉の話』『毛坊主考』『細語の橋』など伝説、宗教民俗関係の著書を中心として、真澄の著作から数多くの引用がみられる。

本稿では『山島民譚集（一）』をテキストとして、伝説研究と菅江真澄の著作との関わりを考察してみたい。

## 二 『山島民譚集（一）』と引用文献

『日本伝説名集』『日本伝説大系』など代表的な伝説資料集を見ると、東北、特に秋田県に関する伝説資料を中心に、菅江真澄の著作からの引用が目につく。

菅江真澄は、今から約二百五十年前に、三河の国に生まれた人である。三十歳の頃に、現在の長野県飯田市あたりから旅をはじめ、新潟県上越地方に向かい、さらに日本海沿岸を北上し山形、秋田、青森、岩手、宮城、反転して北海道江差を中心とした道南地域に渡った。ふたたび本土に戻ると津軽、秋田に滞在し、江戸中後期の天明三年から文政十二年、約四十年にわたって旅に生きた人である。その旅の途中の見聞は、日記、図絵、随筆等に残され、当時の東北、北海道の生活文化をうかがう貴重な記録となっている。晩年は、秋田に腰を落ち着けて、秋田の地誌を編纂したが、編纂途中で病死した。

伝説研究において真澄の著作をはじめて伝説資料としたのは、『山島民譚集（一）』である。その資料の入手先について柳田は、『山島民譚集（一）』の再版序（昭和十七年）の中で、「ちょうどこの本を書いた頃、私は千代田文庫の番人をしていた。そうしていろいろの写本類を、勝手に出し入れをして見ることができたのである」と言っている。

柳田が『山島民譚集（一）』に引用した真澄の著作は、「真澄

遊覧記」と総称されて現在も、その真筆本の大部分は秋田にあるが、真澄の著作は、その貴重性から後に写本が作られた。そのうち明治政府が、作った写本が、現在、国立公文書館の内閣文庫にあり、先の柳田の『山島民譚集（一）』の再版序の記事から、柳田は、この「真澄遊覧記」の写本を引用したと考えられる。

柳田が『山島民譚集（一）』に引用した書籍、雑誌、報告の「引用資料一覧」（本稿の末尾参照）を見ると実に五百を超える資料を引用していることが分かる。それらの多くは、内閣文庫からのものと考えられ、中でも一番引用回数が多いのが、真澄の著作である。

『山島民譚集（一）』の続編については、柳田没後、その遺稿が発見され、昭和三十九年、『定本柳田國男集』二十七巻に自筆校本「山島民譚集（二）」として、昭和四十四年には東洋文庫『山島民譚集』に自筆校本の副本が「山島民譚集（三）」として、それぞれ出版された。「山島民譚集（二）」では、真澄の資料からの引用は無く、「山島民譚集（三）」には、『山島民譚集（一）』同様たくさん引用されている。伝説資料と真澄に関する問題点として、今後、考えていかなければならないと思われる。

## 三 伝説研究と「真澄遊覧記」

柳田國男は『山島民譚集（一）』以後、『日本の伝説』をはじめ自分の多くの著作の中で真澄の資料を引用した。具体的には

以下①～⑩の著作にみられる。

伝説関係の著作では①『神を助けた話』大正九年では「赤子の声と石」「石を積み風習」の項に真澄の記事が引用されている。

②『日本の伝説』は、昭和四年にアルス日本児童文庫8『日本神話伝説集』として出され、その後昭和七年に春陽堂少年文庫34として刊行、さらに昭和一五年には、新改訂版が三國書房から出されているが、「機織り御前」の項では機織淵の伝説、「袂石」の項では成長する石の伝説、「伝説と児童」の項では雨地蔵、寝地藏の話がそれぞれ引用されている。

③『一目小僧その他』昭和九年でも、「鹿の耳」「橋姫」「隠れ里」の項で、真澄の記事が引用され、④『伝説』岩波新書72、昭和十五年では「草仁王」の項に引用されている。雑誌「旅と伝説」に連載していた「木思石語」をまとめて出版した⑤『木思石語』昭和十七年、二十三年では「白米城伝説分布表」に白米城伝説が引用されている。⑥『桃太郎の誕生』昭和八年、十七年では「絵姿女房」「狼と鍛冶屋の姥」「米倉法師」の項にそれぞれ引用され、⑦『史料としての伝説』昭和三十二年では「姥石と女人境界」の項に引用されている。

また宗教民俗関係⑧『おとら狐の話』大正九年にはクダ狐について真澄の著書から引用がある。大正一五年、昭和二十二年にそれぞれ出版された⑨『山の人生』では「山人の通路の事」の項に引用。⑩『木綿以前の事』昭和十四年では「女と煙草」の項で、雷神が嫌うとの理由から村人が煙草をすわないことを

引用。⑪『妹の力』昭和十五年では「イタク杉」「犬子石」項に引用。また単行本以外にも⑫「巫女考」⑬「夜啼石の話」⑭「毛坊主考」⑮「細語の橋」⑯「矢立杉の話」などにも真澄の著作からの記事を引用している。

このように大正三年の『山島民譚集(一)』以降、昭和三十年代に至るまで、伝説や宗教民俗関係の著書を中心として、柳田が真澄の著作から数多くの資料を引用していることがわかる。これらは、『山島民譚集(一)』以降出されなかった『山島民譚集(一)』の続編になる部分と考えられる。

その後、これらの柳田の著作は、『日本伝説名彙』昭和二十五年、日本放送協会出版、柳田國男監修にまとめられ、伝説研究のハンドブックとなった。

昭和六十年に、みずうみ書房から出版された『日本伝説大系』第二巻 中奥羽では、「7三吉神」「12弘法大師」「15北条時頼」「16坂上田村磨」「18佐田六とシロ」「22八郎太郎」「25だんぶり長者」「43阿久利子稲荷」「47伊勢詣りの松」「49三貫桜」「50常陸坊海尊」「52皆鶴姫」「53姫待が滝」「54茶毗沢」「55賢淵」「61錦木塚」「65朝日長者夕日長者」の各伝説の項目に真澄の著作から伝説資料が引用されている。

柳田國男によって「真澄遊覧記」の写本が、内閣文庫で発見されて以降、真澄の著作が伝説資料として、利用される流れが生まれたことがわかる。

また『山島民譚集(一)』の引用資料一覧(本稿の末尾参照)

を見ると、『山島民譚集(一)』のテーマである河童関係の著書『水虎考略』『水虎録話』は別としても、『十方庵遊歴雜記』『新編武藏嵐土記稿』など、内閣文庫所藏資料の地誌、遊覧記からも多く引用していることがわかる。

伝説と近世地誌については、『昔話伝説研究』二十三号「十方庵遊歴雜記特集」の中で伊藤龍平が、「さらに重要なことは、近世地誌の記事が現行の伝説の源となっている場合が少なくない。その事実と地誌の作者の多くが文人であった点、ひいては柳田が近世文人の系譜に連なる嗜好をもっていた点とを重ねあわせると、今日の伝説イメージの生成理解と、その相対化が可能であろう。彼らの文人気質が、伝説の取捨選択にどう影響したのかは一考をようする問題である。」と伝説研究における近世地誌の考察の重要性を指摘している。

また「伝説」という言葉は、菅江真澄も著作で使用している。

○仙北郡神宮寺郷古記由緒録 一卷 此一冊富樫伝市郎筆記也(内扉)……中略……

一 姫神山伝説の事 登り十八丁余。……中略……此節宗任、我姫の義家公に馴染てその謀をもらせしと伝聞て、大に憤慨しかの姫を切殺し、此姫神山に埋葬りしとなん。後の人、姫の崇なせること度々ありしより是を崇て姫神と祭るよし。夫より山の名も姫神山と号ると云々。(『月の出羽路 仙北郡六』文政九年(一八二六) 神宮寺郷古記由緒録の項)

この記事には「姫神山伝説の事」と記されている。内容は、義家に通じた姫を宗任が殺して、その姫を埋めたところが姫神山と呼ばれるようになったという地名伝説である。ただし、ここの「伝説」の文字が「デンセツ」とよまれるのか「イイツタエ」とよまれるのか、他により方があるのか、振り仮名がないので不明である。重要なことは、この記事は、「神宮寺郷古記由緒録」という由緒書の古文書からの引用という点である。

伝説という言葉、また研究用語については、斉藤純が『口承文藝研究』の十七号に「伝説」という言葉からその可能性をめぐって」という論文を発表している。ここで斉藤は、高木敏雄の『日本傳説集』が、柳田の影響下に展開してきた伝説研究よりも前に『東京朝日新聞』を通じて「伝説」という言葉の意味を印象づけたことに触れ、「伝説」という言葉の限界や可能性を考える上で詳しい研究が望まれると指摘している。

伊藤の指摘している近世地誌と伝説、斉藤の指摘する伝説という言葉の意味<sup>2)</sup>を考える上でも『山島民譚集(一)』に引用された「真澄遊覧記」の伝説関係の資料の考察は重要であると筆者は考える。

#### 四 『山島民譚集(一)』と「真澄遊覧記」

そこで次に『山島民譚集(一)』に引用された「真澄遊覧記」の記事について見ていきたい。「真澄遊覧記」を資料A-Nと

して次に示し、適宜『山島民譚集(一)』の柳田の記事を資料①②③、その他比較参照しながら考察をすすめる。

なお本稿は、柳田の著作のテキスト研究、書誌学的な研究ではなく、『山島民譚集(一)』における真澄の著作からの引用記事から伝説研究について考えることが主なので、『山島民譚集(一)』のテキストは、『柳田國男全集5』ちくま文庫を、真澄の記事は『菅江真澄全集』未来社を使用した。

資料A『おくのうらうら』寛政五年(一七九三)五月一日条

蠣崎の里を過なんとすれば行人の云、こゝに鷲の湯といふよき湯あり。むかし火矢にあたりて、はぎのくだかれたる鷲の、湯の泉に入て日をふるまま、いゑてとび去ぬ。さりければしか名づけて、身をうちたる人に、わきてめぐりよしなどいへり。

資料B『月の出羽路 仙北郡二』文政九年(一八二六)峯古河邑の項

(図中の説明文) 戊 鴻の湯、むかし角鷹と鴻と闘ひ鴻の脛折たるを此湯泉に温めて愈たるよし。

資料①『山島民譚集(一)』

先ズ東北ニハ陸奥下北郡川内村蠣崎ノ鷲之湯ハ、昔火箭ニ中ツテ脛碎ケタル白鷲アリテ此ノ泉ニ来タリ浴シ、日ヲ経ルママニ癒エテ飛ビ去リシガ故ニ斯ク名ヅク〔真澄遊覧記六〕

資料AとBは、温泉発見の伝説について書かれている真澄の記事である。しかし資料①で、柳田は、真澄が重視しているところに触れていない。それは「身をうちたる人に、わきてめぐりよしなどいへり」という部分である。柳田は「鷲の湯」の温泉の由来譚には興味は示しているが「打ち身に効く」という効能については記していない。

資料C『雪の出羽路 平鹿郡十二』文政七年(一八二四)大屋寺内邑の項

○骨接薬水虎相伝 此河童相伝てふ霜薬とてころくく在り、みな飲くすりとし、傳ぐすりとせり。また其正骨師を亦市と通号に詠んで能代はじめ、わきて秋田に多し。また横手ノ給人町本ト町新町ノ須田源六郎家法に正骨ノ制薬あり、また仙北ノ郡河口村の鷹鷲太右工門か制ス飛竜散寄方也。もともと正骨ノ医術あり、尾張の浅井家の如し。此水虎相伝と、いづこにも云ひて此薬多し。是もおもふに、此主薬といふは杠板飯也、此杠板飯を河童の尻拭といふ処あり、また河童草といふ処、こは河童草伝をしかあやまり、あやしくも水虎にならひ、かつば相伝といへるもいかゞあらん。

資料②『山島民譚集(一)』

河童ノ薬ト云ウモノハ東ハ出羽ノ果テニモアリ。羽後平鹿郡

栄村大屋寺内ノ某氏ニ於テ製スル河童相伝ト云ウ接骨薬ハ、黒焼ニシテ飲ミ薬トシ又傳薬トス。此ノ薬ヲ売ル者秋田市ニモ能代町ニモ住シ、通名ヲ又市ト云エリ。同ジク平鹿郡ノ横手給人町須田源六郎家伝ノ正骨薬、仙北郡長信田村川口ノ鷹嘴太右エ門ガ制スル飛竜散モ共ニ亦河童ノ相伝ニシテ其ノ家ハ兼ネテ接骨医者ヲ業トセリ。此ノ類ノ秘薬ニシテ河童ガ人間ヨリ夙ク知り居タリト云ウモノハ外ニモ多ク、何レモ其ノ主剤ハ漢名を扛板帰、和名ヲ「イシミカワ」一名「カッパソウ」、又ハ「カッパノシリヌグイ」ナドト称スル植物ナリ〔月之出羽路十二〕

資料C・資料②は、河童の伝えた薬について書かれている。両者とも薬の製造販売者に触れているが、真澄の本草学の師とされる浅井図南の記事に柳田は触れていない。また骨接薬水虎相伝は、河童の薬の主薬「コウハンキ」を「カッパソウ」「カッパノシリヌグイ」と言う別名からの誤伝ではないかと真澄は記している。一方、柳田は「コウハンキ」の和名「イシミカワ」「カッパソウ」「カッパノシリヌグイ」について詳しく言及し「草木図説」七巻からその植物の図を『山島民譚集(一)』に掲げているが、誤伝については言及していない。

資料D『月の出羽路 仙北郡六』文政九年(一八二六) 神宮寺郷古記由緒録の項

一 花蔵院神宮密寺之事 今松橋流真言宗 往古より八幡宮

別当職也。…中略…又快糸と申法印も下向あり〔俗に咽法印と云々〕この法印住職中かわはと申者〔河太郎を云々〕。生捕禁しめて曰、汝年年人を捕食ふ不届也、自今已後我掠ミ当町は不申及、枝郷の者たり共捕食ふ時は、自分の命並一類共に法刀を以て絶可申と厳敷せめければ、かわは涙を流し手を拿せわひたる体也。是に仍て、自今を禁め放ちやりけると申。其節より今の世まで、隣村ごとに年々夏の頃かわはにかとわされ水死の者ありしか、此神宮寺郷の者老人としてかれに捕れ水死の者なし。

資料③『山島民譚集(一)』

羽後仙北郡神宮寺町ノ花蔵院神宮密寺ハ八幡宮ノ別当寺ナリ。京ヨリ快糸法印一名ヲ咽法師ト云ウ山伏下リテ此ノ寺ニ住ム。或ル時河童ヲ生捕ニシテ嚴シク之ヲ戒メシニ、手ヲ合セ涙ヲ流シテ侘ヲスル故ニ放シ遣ル。其ノ徳ニ因ツテ以来此ノ一郷ニハ決シテ河童ノ災ナシ〔月乃出羽路六〕

資料Dでは、カッパを捕えて詫びをいれさせ、以後悪さをしないことを誓わせる法印について書かれている。実はこの話は、先の「姫神山伝説の事」のところで触れた「神宮寺郷古記由緒録」という由緒書の古文書からの引用である。真澄は、この点をこわわっているが、一方、資料③で柳田は、孫引きしていることに触れていない。

資料E『月の出羽路 仙北郡五』文政九年（一八二六） 神宮寺  
邑の項

○人見日記に、天英君神宮寺の川のほとりに放鷹し給ひ、白鳥をうち給はむとて舷へ鉄砲を掛給ひしとき、水中より怪獸黒毛の生ひたる手をさし出し、筒の半をむづと掴りぬ。君大に驚き引のき給ふに、終に引負け筒を奪れ給ひて、君いかり給ひて、水を乾してかの怪獸を駆り出すべしとありけれども、さばかりの大河、それゆゑ水連のものを入れ、さがしもとめさせ給ひしかども見えざりし。其後萩台村の六兵衛なる水練ひそかに潜り、洪福寺淵の底にて捜し出して人しらず角館の北家へ売りしが、年経てかの御筒なる事聞えければ、享保七（一七二二）年閏寅二月とかや、右の御筒北家より献上なる。（武庫御記録には、花立村の河原へ流れ寄たりしを北家へ下され、北家へ下され、北家より又献上といへり。）世に河熊の御筒と申伝へ候。かの怪獸の握りし痕、筒の半に残れりと見えし。六兵衛怪獸に崇られしとて其翌年冬、その淵へはまり死せりといふ。此物語は仙北ノ郡稲沢村の盲人若都なるもの委く知りて、人にかたりしと名む。」云々と見えたり。山高ければ水深くして、こはさま／＼なる処山にも河にもいと／＼多し。（天註―河辺ノ郡椿川村の舟子飲河を下るとて、ある処の岸に舟をつなぐ。ことふな人は我家近ければ、みながおのれ／＼が家に行て宿りぬ。此椿川の舟子一人り舟守り泊しけるに、やをら更行ころ、あら浪の音せり。こは惟しと思ふに、舷にもろ手をかくるものあり。

此男おき上り彎刀の手にあたるをさちに、ふなばたもくだけよときりこみて、此夜はや明かしまちわび、明てこれを見れば、猫の毛のごとき毛の生ひたる獸の片手にぞありける。今も其手椿川村に在り。これ川熊てふものならむといへり。』

資料Eは秋田、佐竹藩主が、川で川熊という怪獸に鉄砲をとられる話で、真澄は秋田の人見蕉雨という文人の日記から引用したことを書いているが、ここでも柳田は孫引きしている引用資料には触れていない。

資料F『雪の出羽路 平鹿郡九』文政七年（一八二四）今泉村の項

○駒引村。むかし、館前村の八幡宮の御前近く乗うち行人みな落馬しければ、人みな恐みて、馬を下り曳行たりしかば駒曳の名ありといへど、さるよしならば馬引ともいふべきにといへる人あり。又云ふ、八幡宮の神事は八月十五日なれば都の駒むかへ也。今や引らん望月の駒といふ歌こゝろもて、駒曳て神に奉るよしをいへり。いと／＼めづらしき城主のふるまひ、うべ／＼しき事になもありける。

資料Fは、駒引という地名の由来についての記事である。柳田は駒引きの伝承事例の一つとしてとりあげている。

資料G『くめじのはし』天明四年（一七八四）七月三十日条

むかし、ぬす人のをさ熊坂がこの山にこもりて、近き里わたりの馬をぬすみて、月毛は栗毛に染め、栗毛は烏黒に色をぬりかえて市にうりき。其そめどのの跡とて礎も残りぬ。このあたりのことわざに、三ツ子のよこぞうりといふ諺あり。熊坂、三のとし伯母の掃枝（こうがい）をぬすみ、わがふみもの（履物）にふみかくし、よこふみにさしふんで、にげさりしとなん、行つる友のかたりぬ。赤河（信濃町）といひ関川といふ流あり。此水露斗も飲たるものは盗せるきざし出るとは、長範がくみたるゆへにいふにや。はた、もろこしの盗泉のたくひにや。

資料Gは、馬盗みの話と、飲むと盗みところを起こさせる関川という川について書かれ、中国の盗泉と同じではないかと真澄は指摘している。一方、柳田は馬盗みの熊阪長範の事例の一つとしてとりあげている。

#### 資料H『おぶちのまき』寛政五年（一七九三）十二月四日条

いつの頃ならん、出戸より、いとあさましきまで大に、つねのうま四五がたけして牧の駒どもをひしくとくひ、人をも追めぐる馬の出でければ、村の名もでとよび、その馬の見あらためはかりし処を高架と名づけ、かたちのたいらかなりしとて、そこなる沼を平沼とよび、馬の背いと長く七の鞍おくによかりければ、其おき見しところをくらうちと呼ぶとぞ。此うまは、みころして埋みおきたりける、其つかを七くらといふといへり。

なかむかしのころ、やんごとなき君の仰とて、な、くらのつかのしたにかくしたるうまの、まことに大なりしが、そのしら骨ひとつとりてこと、のたまひしま、御使をいざなひて、つかほりこぼちて、背のほねにやありつらんめぐり二尺にあまりけるを持帰り給ふとなん。

資料Hは、大きな馬が、他の馬を食べるので殺して埋めて塚を作り、ナナクラとよんだ塚の由来と、後に塚を掘り返すと大きな骨が出でたことが記されている。柳田は巨馬の事例としてとりあげ、ナナクラは、七座として北斗七星、つまり竜馬を妙見に配する妙見信仰の事例として指摘している。

#### 資料I『男鹿の春風』文化七年（一八一〇）四月九日条

馬柵の柱に、あやしげなる神門をかいて家ごとに見えたり。そのよしをとへば、二とせ馬にはじめて鍼せし、その馬の血して、馬のくすしが馬の鬣（たてがみ）をきり、あるは薬もても、しか鳥居を画て馬樞神に奉るといふ。

資料Iは、二歳馬にはじめて灸をすえるときの馬医が、馬の神様バレキシシンに対して、馬の血、タテガミ、薬で鳥居を作るこことが記されている。柳田は馬医の馬神祭式の事例としてとりあげている。

資料J 『まきのふゆがれ』寛政四年（一七九二）十一月二日条

左に九陪ぢごくというあり。こは、いにしへ左近どのと聞えたるが、国のかみをおかし奉らんとてこ、におち入給ふ也、見たまへ長刀のあと、そが馬の蹄のあとあり。これなん宇多邑作兵衛がぢごくと、あやしきもいへり。たいないくゞり（胎内潜り）の崖も雪ふかし、又雪なきときも今は行人なしと、あないかたる。

資料K 『みかべのよるい』文化二年（一八〇五）七月十二日条

路のかたはらに、こまつめ石とて、馬蹄のひとつあらわれたるが、路のかたはらに屋形してぞありける。

資料J・Kは、国主に背いて殺された九戸左近の長刀の傷跡とともに馬蹄の跡のある石について記されている。また駒爪石を社に祀ることが記されている。これらを柳田は馬蹄石の事例としてとりあげている。

資料L・M 『月の出羽路 仙北郡四』文政九年（一八二六）南  
檜岡邑の項

○木直村、中古木月と作し書あり、往古は七寸と云ひつる村也。いにしへ、牝馬養ふ家の馬ども毎夜にうち騒ぎたち嘶きける事のあやしき、人々起出て松の火をか、けて是を見れども、さらにも、かげだにもなし。こは人の目にこそ見えね、副河の岳より神馬の飛下りて、牝馬ある家の馬柵を躓えて夜なく

たはける也。そを誰れ見し人しもあらねど、あさなな蹄の跡は此面彼面にぞ残りぬ。かくて後に、牝馬の馬柵に七寸の駿馬を産れたり、そを七寸とはいへり。此馬あら馬にて山に柵を立て繋ぎける。そを小杣大杣とて、今化て小山、小岑となれるあやしの物語もあれど、七寸村と云ひつるよしは云々。

資料L・Mは、キヅキという村の名前の由来になった神馬の話。

柳田は名馬池月の伝承事例としてとりあげている。

資料N 『あきたのかりね』天明四年年（一七八四）九月二十八日条

此磯のなのりそを神馬藻といふは、いにしへ神功皇后、このなぎさにみふねよせ給ひて、御馬やしなはんはんに秣なければ、磯菜、にぎめなど、はた、なのりそをもはら秣にぞし給ふより、此草を神馬草と、しか書ける。

資料Nは、神功皇后が征韓の時に船中にマグサが無かったので海草を食べさせた。以後、その海草を神馬草という名の由来について記されている。柳田は神馬草の事例としてとりあげている。

以上、『山島民譚集（一）』に引用された「真澄遊覧記」の記事についてみてきたが、『山島民譚集（二）』の研究を引き継いだ石田英一郎が、『河童駒引考』のむすびで、「柳田國男先生はその『山島民譚集』において、日本の水精たる河童伝説に、河

童がおおむね水辺の牧に遊ぶ馬を、水中にひきこもうとして失敗したという型なのが、全国にひろく普及している事実から出発して、このような伝説と、水辺に雌馬を放して竜または水神の胤をうるという思想と、池月磨墨のごとき天下の駿足が水中、少なくとも水辺より出現したという俗信とが、もともと一つの源に発する相互に連繫した一群の民間信仰にもとづくことを示唆せられた」と書いている。

つまり「河童駒引伝説」を考える基本資料として柳田は、考察のポイントとなるところに「真澄遊覧記」の資料A～Nを引用したのである。

## 五 おわりに―伝説研究と博物学

菅江真澄の著作は、『山鳥民譚集(一)』をはじめとして柳田國男にたくさんの伝説資料を与えた。しかし当然、真澄は、今日の学術用語としての伝説という言葉の意味を意識していたわけではない。真澄は、古記録等に記された話や、ムラのイイツタエを本草学や博物学の目で記録していたのである。それが柳田の伝説研究の資料になるということは、そもそも柳田の伝説研究には、博物学と通じるところがあると考えられる。

柳田國男の伝説研究と真澄がながつながって行くのはなぜかと考えると、『山鳥民譚集(一)』の引用資料一覧(本稿の末尾参照)をみると、『和漢三才図会』や先にあげた『草木図説』など博物

学書、本草学書からの引用があることから分かるように、明治生まれの柳田は、江戸の本草学的、博物学的な素養を持った世代であることがわかる。

そして柳田の伝説研究における菅江真澄を考えるとき、「目玉の学問」たる江戸の博物学や本草学が、真澄と柳田を結び付けているという事実が気がつく。また二人とも旅をしながら多くの文献資料をその著作に引用するという執筆スタイルも似ている。実際、真澄もたくさんの引用文献<sup>4</sup>を使用しながら「真澄遊覧記」を記していた。

具体的に柳田國男の伝説研究を、博物学的な視点から見ると、「名物学」・「物産学」としての一面を持つのではないかと筆者は考える。『山鳥民譚集(一)』に記された續刊豫告には、「名物索引」の項目も見られる。「名物学」は名前と具体物の関係を調べる分野で、例えば、名物である「駒爪石」は、なぜ「駒爪石」と言われるのかを考えるのが「名物学」である。「物産学」は、各地の名物「駒爪石」を調べるものであり、それらを本来の博物学は、最終的に名物である「駒爪石」を産業化することを目指した。だから高木春山の『本草図説』<sup>5</sup>をはじめとして江戸時代の博物学では、名物の「河童」は物産の一つとしてとりあげられている。

真澄の著作といった江戸の博物学的視点を持った資料からスタートした柳田の伝説研究は、産業化ではなく民衆の生活史を考察する民俗学として展開した。しかし、今日では、伝説やそ

の主人公がマチヤムラおこしに活躍し、郷土の名物になるという江戸の博物学がめざした名物が産業化する方向にすすんでいくようにみえる。

注

- (1) 『山島民譚集(一)』に引用された真澄遊覧記の中で、『あきたのかりね』(大館市立中央図書館蔵「真崎勇助旧蔵」)は、内閣文庫に写本のない著作である。また『あきたのかりね』をはじめとした「真澄遊覧記」の写本は柳田の『諸国叢書』に加えられている。このことについて田中宣一は、『柳田國男と菅江真澄』(『悠久』第九十三号、平成十五年、おうふう)の中で、次のように述べている。「柳田は、明治四十三年五月に、山中共古から紹介された山形県出身の蔵書家羽柴雄輔に接近し、羽柴が秋田在住の真崎勇助から真澄の自筆本『鰐田乃莉寝(あきたのかりね)』を借用して、筆写して所持していることを知って、羽柴にその転写を依頼し、手元に届いた同書を大正二年の五月に精読している。」田中は、このことを、柳田の内閣文庫とは異なるもう一つの真澄発見であり、諸地域に残る「真澄遊覧記」探究の旅の始まりと指摘している。
- (2) 伝説について柳田國男は『口承文藝史考』の中で、『山島民譚集』を世に送った頃には、私なども現に同じ意見で、今ならば明らかに伝説と名づくべき諸国の口碑を、民譚す

なわち民間説話の中に数えていた。あるいは意見などいふべきものでなく、ただ世間並みにそう信じ切っていたのかも知れない。」と記している。つまり「真澄遊覧記」の記事は、はじめは伝説資料ではなかった。柳田の伝説研究の深化によって伝説資料とされたのである。そして、由緒書、随筆等の文字資料から「真澄遊覧記」に今日、伝説資料とされる話を引用する真澄のスタイルと、その博物学的な視点は、柳田をはじめとしたその後の伝説研究に影響を与えたと思われる。

- (3) 柳田は没後出版された「私の信条」(『ささやかなる昔』筑摩叢書二五九、昭和五十四年)の中で、「まず第一に年少の頃から、できるだけ人の読まない本を読み、人の知らない事を知ろうという、野心を持って学問を始めたこと、これは今から考えてみると、江戸後期に始まった随筆流行、よく言えば考証学風の目に見えぬ感化だったらしい。」と告白している。

- (4) 真澄の旅日記の書籍からの引用については、小堀光夫「菅江真澄と西行伝承・『かすむこまがた』『はしわのわかば』を中心として」(『國學院雜誌』平成十五年三月号)を参照。
- (5) 『本草図説 水産の部』高木春山、嘉永五年(一八五二)頃、西尾市立図書館岩瀬文庫蔵(「江戸博物館鑑」一 本草図説 水産』昭和六十三年、リプロボート) 河童の項を参照。

(こぼり・みつお/世間話研究会)

- 『山島民譚集 (一)』
- 引用資料一覧 (『柳田國男全集 5』ちくま文庫)
- 1 『真澄遊覧記六』 p61  
 2 『月之出羽路二』 p61  
 3 『三郡雜記下』 p62  
 4 『大野郡誌』 p62  
 5 『日本軼地療養誌』 p62  
 6 『十方庵遊歷雜記初編上』 p62  
 7 『新編武蔵風土記稿』 p62・65  
 8 『有馬大鑑』 p62  
 9 『古名録四』 p63  
 10 『東作誌』 p63  
 11 『豊後温泉誌』 p63  
 12 『三国伝記』 p65  
 13 『東国旅行談』 p65  
 14 『本草綱目』 p65  
 15 『難波江六』 p66  
 16 『夜窓鬼譚』 p66  
 17 『博多細記』 p66  
 18 『本草綱目』 p67  
 19 『筭埃隨筆』 p67  
 20 『サヘヅリ草』 p68  
 21 『南蘭草下』 p68  
 22 『和漢三才図会四十』 p68  
 23 『和漢三才図会八十』 p68・69  
 24 『裏見寒話六』 p70  
 25 『茨城名勝誌』 p71  
 26 『水虎録話』 p72  
 27 『雪之出羽路十二』 p72  
 28 『草木図誌巻七』 図版 p72  
 29 『中陵漫録巻十三』 p73  
 30 南方熊楠氏説 p73  
 31 『佐渡風土記』 p75  
 32 『越後名寄四』 p76  
 33 『今昔物語』 p76  
 34 『日本伝説集』 p76  
 35 『郷土研究一ノ十二』 p76  
 36 『越中旧事記』 p76  
 37 『肯構泉達録十五』 p77  
 38 『八犬伝』 p77  
 39 『遠野物語』 p78  
 40 『月乃出羽路六』 p79  
 41 『新編会津風土記』 p79  
 42 『越後名寄三十一』 p80  
 43 『小平物語』 p80  
 44 『日本宗教風俗志補遺』 p80  
 45 『濃陽志略』 p81  
 46 『寓意草上』 p81  
 47 『宝曆現來集二十一』 図版 p82  
 48 『宝曆現來集二十一』 p82  
 49 『神奈川県民政資料小鑑』 p82  
 50 『田子乃古道』 p82  
 51 『観惠交話下』 p83  
 52 『落穂余談四』 p84  
 53 『阿州奇事雜話二』 p84  
 54 『土州淵岳志』 p85  
 55 『土佐海』 p85  
 56 『水虎考略後篇三』 p86  
 57 『三国名勝図会』 p86・111  
 58 『雲陽志』 p87  
 59 『日本伝説集』 p87  
 60 『長門風土記』 p88  
 61 『蒼柴園隨筆』 p88  
 62 『津村氏譚海』 p89  
 63 『水虎考略後篇』 p89  
 64 『西播怪談実記』 p90  
 65 『諸國便覧』 p91  
 66 『水虎録話』 p92  
 67 『本朝故事因縁集』 p92  
 68 『沼名前神社由来記附録』 p93  
 69 『竹爪子二』 p93  
 70 『水虎考略後篇二所引』 p94  
 71 『落穂余談四』 p95  
 72 『水虎考略』 p96  
 73 『沖繩語典』 p97  
 74 『和漢三才図会』 p97  
 75 『遠野物語』 p97  
 76 『下学集』 p98  
 77 『倭名抄』 p98  
 78 『物類称呼二』 p99  
 79 『本草綱目积義四十二』 p99  
 80 『備中話十一』 p99  
 81 『佐賀県方言辞典』 p100  
 82 『佐渡志』 p101  
 83 内藤吉之助君談 p101  
 84 『本草啓蒙』 p101  
 85 『南部方言集』 p101  
 86 『サヘヅリ草』 p101  
 87 『西遊記』 p101  
 88 『観惠交話』 p102  
 89 『扶桑怪異実記』 p102  
 90 南方熊楠氏報 p102  
 91 『水虎録話』 p103  
 92 『遠野物語』 p103  
 93 『郷土研究二巻三号』 p104  
 94 『水虎考略後篇所引蓬生談』 p104  
 95 『水虎新聞雜記』 p104  
 96 『日州水虎新話』 p104  
 97 『水虎録話』 p105  
 98 『観惠交話』 p105  
 99 『水虎考略』 p105  
 100 『筭埃隨筆一』 p105  
 101 『本朝俗誌』 p106  
 102 『竹爪子四』 p106  
 103 『三河雀』 p106  
 104 『老嫗茶話』 p107  
 105 『武家高名記』 p107  
 106 『陰徳太平記』 p107  
 107 『志士清談』 p107  
 108 南方熊楠氏報 p107  
 109 『芸藩通志』 p107  
 110 『所歴日記』 p108  
 111 『今昔物語』 p108  
 112 『作陽志』 p108  
 113 『若狹郡県志』 p109  
 114 『日本宗教風俗志』 p109  
 115 『信濃奇勝録』 p109  
 116 『淡海木間撰』 p110  
 117 『遠江風土記伝』 p110  
 118 『十方庵遊歷雜記三編中』 p110  
 119 『雅言賞非三』 p110  
 120 『土州淵岳志中』 p111  
 121 『六物新志』 p111  
 122 『月堂見聞集七』 p111  
 123 『新編武蔵風土記稿』 p111  
 124 『雪乃出羽路十三』 p111  
 125 『和賀稗貫二郡鄉村誌』 p112  
 126 『真澄遊覧記八』 p112  
 127 『今昔物語』 p112  
 128 『利根川図志二』 p112  
 129 『酉陽雜俎続集八』 p113  
 130 『十方庵遊歷雜記二編中』 p113  
 131 『芸藩通志』 p113  
 132 『甲斐国志』 p114  
 133 『十方庵遊歷雜記三編下』 p115  
 134 『見世物雜誌二』 p115  
 135 『月乃出羽路五』 p116  
 136 山方石之助君談 p116  
 137 林義直氏談 p117  
 138 『雪乃出羽路九』 p117  
 139 『絵銭譜』 p118  
 140 『塩尻六十四』 p118  
 141 南方熊楠氏報 p120  
 142 『馬経』 p120

- 143 『安驥集』 p120  
 144 『集古十種馬具三』 p121  
 145 『古今著聞集二十』 p121  
 146 『梁塵秘抄二』 p121  
 147 『山中翁神仏社守集卷十』 p121  
 148 『郷土研究一卷二号』 p122  
 149 『補註相驥經六所引畜養本草』 p122  
 150 『証類本草』 p122  
 151 『虎鈴經』 p122  
 152 『凶像馬経及び聖雅翼』 p122  
 153 『独異志』 p122  
 154 『パンチャタントラ』 p122  
 155 『菩薩本行経』  
 156 『周礼』 p122  
 157 『補註相驥経七』 p123  
 158 『塵添壘囊抄三』 p123  
 159 『糠部五郡小史』 p123  
 160 『遠碧軒記上』 p124  
 161 『彈左衛門書上』 p124  
 162 『駿国雜誌七』 p124  
 163 『紀伊国統風土記』 p124  
 164 『淡海木問攷二』 p125  
 165 『越ノ下草下』 p125  
 166 『米府鹿子四』 p125  
 167 『勝善経』 p126  
 168 『猿屋惣左衛門伝書』 p126  
 169 『遠碧軒記上』 p126  
 170 『裏見寒話四』 p126  
 171 『祠書雜識三十六』 p128  
 172 『寺社捷徑』 p128  
 173 『風俗問状答書一』 p129  
 174 南方熊楠氏報 p129  
 175 『勝善経』 p129  
 176 『新編武蔵風土記稿』 p130  
 177 石黒忠篤氏報 p131  
 178 『今立郡誌』 p132  
 179 『源平盛衰記』 p132  
 180 『武家名目抄』 p132  
 181 『塵添壘囊抄卷十三』 p133  
 182 『阿弥陀経』 p133  
 183 『峯相記』 p133  
 184 『和訓栞』 p133  
 185 『土陽陰見記録下』 p136  
 186 『日本周遊記談』 p136  
 187 『親恵交話下』 p137  
 188 『笈埃隨筆一』 p137  
 189 高木敏雄氏談 p137  
 190 『土陽陰見記録下』 p137  
 191 『越後名寄十八』 p137  
 192 『越後風俗志七』 p138  
 193 『仁徳記』 p138  
 194 『竹抓子四』 p138  
 195 『宝曆現來集七』 p138  
 196 『筑後志下』 p139  
 197 『校訂筑後志』 p139  
 198 『筑後地鑑下』 p139  
 199 『長門風土記』 p140  
 200 『撰陽落穂集二』 p141  
 201 『撰陽見聞筆拍子三』 p141  
 202 『郷土研究一ノ五号川口氏』 p141  
 203 『風俗問状答書』 p141  
 204 『土州淵岳志』 p142  
 205 『真澄遊覽記二十三』 p143  
 206 『郷土研究一ノ四号』 p144  
 207 石田収蔵氏談 p144  
 208 『日本伝説集』 p145  
 209 『水虎録話』 p145  
 210 佐々木繁氏談 p146  
 211 『東国輿地勝覽十八』 p147  
 212 『想山著聞奇集一』 p148  
 213 『山陽美作上』 p148  
 214 『新編武蔵風土記稿』 p149  
 215 『四神地名録』 p149  
 216 『新編武蔵風土記稿所引縁起』 p149  
 217 『山吹日記』 p149  
 218 山中笑翁書簡 p150  
 219 『白川古事考二』 p150  
 220 『倭名抄』 p150  
 221 『太宰管内志』 p150  
 222 『讃岐三代物語』 p151  
 223 『甲陽軍鑑』 p151  
 224 『檜寛堂隨筆』 p151  
 225 『諸国旅雀五』 p152  
 226 『当代記』 p152  
 227 『叢雲日件録』 p152  
 228 『猿屋伝書』 p152・155  
 229 『駿国雜誌七』 p152  
 230 『下野風土記下』 p153  
 231 『東京人類学会雜誌第二百六十号柴田氏』 p153  
 232 『新編武蔵風土記稿』 p153  
 233 『三国名勝図会』 p153・164  
 234 『土佐州郡志』 p153  
 235 『土佐国古雜志』 p154  
 236 『万葉集』 p154  
 237 『倭名鈔』 p154  
 238 『説文』 p154  
 239 『漢語抄』 p154  
 240 『新撰字鑑』 p154  
 241 『相驥經二』 p154  
 242 『源平盛衰記』 p154  
 243 『比古婆衣九』 p154  
 244 『素問』 p155  
 245 『弘賢隨筆五十七』 p155  
 246 『埤雅』 p155  
 247 『華陽皮相』 p155  
 248 『芸藩通史』 p155  
 249 『尾張志』 p156  
 250 『真澄遊覽記三』 p156  
 251 『但馬考』 p156  
 252 『行脚隨筆上』 p157  
 253 『作陽志』 p158  
 254 『勢陽徑諺十一』 p158  
 255 『燈火録』 p159  
 256 『新編会津風土記所引縁起』 p159  
 257 『東京人類学会雜誌第九十五号昇氏』 p160  
 258 『風俗問状答』 p160  
 259 『雅鷲合戦物語』 p160  
 260 『嬉遊笑覽』 p161  
 261 『中古雜唱集』 p161  
 262 『宇治拾遺物語六』 p162  
 263 『新編武蔵風土記稿』 p163  
 264 『風俗問状答』 p163  
 265 『行脚隨筆上』 p163  
 266 『笈埃隨筆八』 p163  
 267 『有斐齋前記』 p163  
 268 『仙台封内風土記』 p163  
 269 南方熊楠氏報 p164  
 270 『山陽美作記上』 p164  
 271 『路原捨業所録天明登攀記』 p164  
 272 『新著聞集所引寛文四年登攀記』 p164  
 273 『伊水温故』 p165  
 274 『甲陽記』 p165  
 275 『裏見寒話』 p165  
 276 『菊地風土記』 p165  
 277 『佐渡志五及鍬石考』 p165  
 278 『浦佐組年中行事』 p165  
 279 『北魚沼郡誌』 p165  
 280 『新編会津風土記』 p165  
 281 『奥相志』 p165

- 282 『雪乃出羽路』 p165  
 283 山方石之助氏報 p165  
 284 『雪乃出羽路』 p165  
 285 『仙梅日記』 p166  
 286 佐々木繁氏談 p166  
 287 「東京人類学会雑誌第百五十九号」 p166  
 288 『兔園小説別集上』 p167  
 289 『本朝俗諺志』 p167  
 290 『新著聞集』 p167  
 291 『地名辞書』 p167  
 292 『越後野志六』 p168  
 293 『奥羽観跡聞老誌』 p168  
 294 『新編会津風土記』 p168・181  
 295 『越後野志十九』 p168  
 296 『地名辞書』 p169  
 297 『延喜式』 p169  
 298 『文徳実録仁寿元年九月二日条』 p169  
 299 『吾妻鑑』 p170  
 300 『地名辞書』 p170  
 301 『奥羽観跡聞老誌』 p170  
 302 『延喜式』 p171  
 303 『吾妻鑑』 p171  
 304 『新編相模風土記』 p172  
 305 『伊豆志四』 p172  
 306 島地大等師説 p173  
 307 『甲斐落葉』 p173  
 308 『地名辞書』 p174  
 309 『嬉遊笑覽』 p174  
 310 『寺社捷徑』 p174  
 311 『高崎志』 p174  
 312 『続甲子夜話七十三』 p174  
 313 『嬉遊笑覽』 p175  
 314 山中笑翁談 p175  
 315 『圓太曆正平元年八月十二日条』 p176  
 316 『名所図会』 p176  
 317 『燈火録』 p177  
 318 『北海遊簿』 p177  
 319 『飛驒之山川』 p177  
 320 『播磨鑑』 p177  
 321 『遊囊勝記』 p177  
 322 大内青巒氏談 p177  
 323 『越後野志十八』 p177  
 324 『松浦記集成』 p178  
 325 『綴喜郡志』 p178  
 326 『雲根志』 p178  
 327 『卯花園漫録』 p178  
 328 『犬山名所図会』 p179  
 329 『讃岐三代物語』 p179  
 330 『三郡雜記下』 p179  
 331 『盛衰記』 p179  
 332 『和氣絹上』 p179  
 333 『阿州奇事雜話一』 p180  
 334 『古風土記』 p180  
 335 『越後野志十一』 p180  
 336 『肥後国志』 p180  
 337 『西讃府志』 p181・199  
 338 『三原志稿』 p181  
 339 『日本宗教風俗志』 p182  
 340 『本朝俗諺志五』 p182  
 341 『臥雲日件録長祿二年閏正月二十五条』 p182  
 342 『都名所図会』 p183  
 343 『臥雲日件録』 p183  
 344 『大野郡志』 p183  
 345 『甲斐国志』 p183  
 346 『真澄遊覧記八』 p184  
 347 「考古学雑誌二卷十号拙稿「勝善神」』 p184  
 348 『猿屋伝書』 p184  
 349 『三国名勝図会』 p185  
 350 『真澄遊覧記二十九』 p185  
 351 『淡海木間撰』 p186  
 352 『延喜式』 p186  
 353 『左馬寮式』 p186  
 354 『続日本記』 p187  
 355 『台記久安二年九月十四日条』 p187  
 356 『元享釈書』 p187  
 357 『花鳥余情』 p187  
 358 『真澄遊覧記十』 p187  
 359 『扶桑略記』 p188  
 360 『日本書紀雄略天皇十三年九月条』 p188  
 361 『続日本記』 p188  
 362 『津島記事』 p189  
 363 『本朝国語』 p189  
 364 『甲州嘶』 p189  
 365 『甲斐国志』 p189・190  
 366 『山梨県市町村誌』 p189・190  
 367 『和漢三才図会』 p189  
 368 『撰陽群談』 p190  
 369 『大和国遊誌下』 p190  
 370 『朝風意林所録斑鳩寺縁起』 p190  
 371 『曳馬拾遺』 p190  
 372 『新編相模風土記』 p191  
 373 『諸神社録』 p191  
 374 『新編武蔵風土記稿』 p191・193・197  
 375 『長門風土記』 p191  
 376 『淡海木間撰』 p192  
 377 『続古今集』 p192  
 378 『地名辞書』 p192  
 379 『眞墓内伝』 p192  
 380 『神名帳頭注』 p193  
 381 『夏山雜談一』 p193  
 382 『今昔物語十三』 p193  
 383 『肥後国志』 p193  
 384 『燈下録』 p193  
 385 『出雲国懷橋談』 p194  
 386 『古風土記』 p194  
 387 『上野国誌』 p194  
 388 『奥羽観跡聞老志』 p194  
 389 『三千里』 p194  
 390 『山梨県市町村誌』 p195  
 391 『太宰管内志所引筑陽記』 p198  
 392 『神祇令義解』 p198  
 393 『西讃府志』 p199  
 394 『古風土記』 p199  
 395 『国造本紀』 p200  
 396 『尾張誌』 p200  
 397 『山陽美作記上』 p200  
 398 『三国地誌』 p200  
 399 『撰陽群談』 p200  
 400 『本朝国語』 p200  
 401 『阿波国徴古雜抄三所録、渋谷氏旧記』 p201  
 402 『本朝国語』 p201  
 403 『能登国名跡志』 p201  
 404 『義経記』 p201  
 405 『譚海十二』 p201  
 406 『新編武蔵風土記稿』 p201  
 407 『諸国旅雀』 p201  
 408 『著作堂一夕話』 p202  
 409 『新編武蔵風土記稿』 p202  
 410 『真澄遊覧記五』 p202  
 411 『相州留恩記略三』 p202  
 412 『吉田郡誌』 p202  
 413 『沖繩語典』 p204  
 414 『古今著聞集二十』 p206  
 415 『万葉集五』 p206  
 416 『吉賀記中』 p207  
 417 土佐国群書類従九所録竜馬祠記附録』 p207

- 418 『宵話』 p208  
419 『西郊余翰四』 p208  
420 『土州淵岳志』 p208  
421 『燈下録』 p208  
422 『三国名勝図会』 p209  
423 『山陽美作記』 p209  
424 『東作誌』 p209  
425 『奥羽觀跡聞老志』 p209  
426 『白山遊覽図記七』 p210  
427 『三郡雜記下』 p210  
428 『真澄遊覽記三十二下』 p210  
429 『真澄遊覽記三十一』 p210  
430 『和賀雜貫二郡鄉村志』 p210  
431 『北憲鎖談二』 p211  
432 『觀惠交話下』 p211  
433 『寓意草下』 p211・237  
434 『盛衰記』 p211  
435 『糠部五郡小史』 p212  
436 『月乃出羽路』 p212  
437 『三郡雜記上』 p212  
438 『山形県地誌提要』 p212  
439 『新編会津風土記』 p212  
440 『越後名寄三十一』 p213  
441 『地名辞書』 p213  
442 『能登国名跡志』 p213  
443 『駿国雜誌二十五』 p213  
444 『山吹日記』 p213  
445 『房総志料』 p214  
446 『十方庵遊歴雜記五編下』 p214  
447 『千葉県古事志』 p214  
448 『遊歴雜記』 p214  
449 『糠部五郡小史』 p214  
450 『越後名寄三十一』 p215  
451 『讚岐案内』 p215  
452 『新編武蔵風土記稿』 p215  
453 『日本山岳志』 p215  
454 『元享釈書』 p216  
455 『遊囊贖記』 p216  
456 『駿国雜志』 p216  
457 『飛州志』 p216  
458 『越後名寄三十一』 p216  
459 『淡海水間攷』 p216  
460 『伊勢名勝志』 p216  
461 『伊勢名勝志所引勢陽雜記』 p217  
462 『越後名寄所引寺島良安説』 p217  
463 『芸藩通志』 p217・226  
464 『大日本老樹名木誌』 p217  
465 『吉加記上』 p217  
466 『大日本老樹名木誌』 p217  
467 『石見外記』 p217  
468 『隱岐視聽合記』 p218  
469 『出雲懷橘談上』 p218  
470 『後太平記』 p218  
471 『阿州奇事雜話一』 p218  
472 『南路志四十七』 p219  
473 『土佐日記』 p219  
474 『豊国小誌』 p219  
475 『三国名勝図会所引伊佐古記』 p219  
476 『延喜式』 p219・225  
477 『津島記事』 p220  
478 『日本周遊奇談』 p220  
479 『筑後地鑑』 p220  
480 『筑後志』 p221  
481 『新編武蔵風土記』 p221・222  
482 『利根川図志』 p221  
483 『阪田郡誌下』 p221  
484 『相中襍誌』 p222  
485 『通俗荏原風土記稿』 p222  
486 『阿州奇事雜話三』 p222  
487 『駿国雜志』 p222  
488 『鹿角志』 p223  
489 『月乃出羽路四』 p224  
490 『南方氏神足考』 p224  
491 『三郡雜記下』 p224  
492 『有斐齋劄記』 p224・226  
493 『但馬考所引国名風土記』 p225  
494 『漫遊人国記』 p225  
495 『西国海辺巡見記』 p226  
496 『讚岐三代物語』 p226  
497 『東国輿地勝覽』 p227  
498 『伊豆志』 p227  
499 『駿国雜志』 p228  
500 『諸国里人談四』 p228  
501 『長門風土記』 p228  
502 『三国地誌』 p229  
503 『駿国雜志』 p229  
504 『本朝俗諺志』 p229  
505 『式』 p229  
506 『甲子夜話』 p230  
507 『続甲子夜話五十七』 p230  
508 『万葉集』 p230  
509 『倭名鈔』 p230  
510 『下学集』 p230  
511 『言塵集』 p230  
512 『齋田乃菴寝』 p230  
513 『三国名勝図会』 p231  
514 『日東魚譜卷四』 図版 p231  
515 『大和本草』 p232  
516 『沖繩語典』 p232  
517 『証類本草』 p232  
518 『異物志』 p232  
519 『神驗図経』 p232  
520 『古名考五十三所引』 p232  
521 『古名考所引山槐記治承二年十一月十二日条』 p232  
522 『越後名寄十七』 p232  
523 『荘内物語附録』 p232  
524 『觀惠交話上』 p233  
525 『東国輿地勝覽十八』 p233  
526 『塵添塩囊抄』 p233  
527 『千葉県古事志』 p234  
528 『雲根志後篇』 p234  
529 『南路志続編稿草二十三』 p234  
530 『渡辺幸菴對話』 p234  
531 『觀惠交話上』 p234・235・236  
532 『其角甲戌紀行』 p234  
533 『集古十種』 p234  
534 『新編武蔵風土記』 p235  
535 『石見外記』 p235  
536 『大日本老樹名木志』 p236  
537 『駿国雜志卷二十五』 p236  
538 『東京人類学会雜誌第百八号』 p237  
539 『和漢三才図会七十四』 p237  
540 『撰陽群談三』 p237  
541 『太宰管内志』 p238  
542 『浪華百事談二』 p238  
543 『浪華百事談七』 p239  
544 『猿屋伝書』 p239  
545 『延喜』 p239  
546 『延喜式四十八』 p239  
547 『一話一言所引獅子掌録』 p240  
548 『外山且正君談』 p240  
549 『本朝俗諺志一』 p241  
550 『和訓栞』 p241  
551 『百卷本塩尻二十五』 p241  
552 『甲斐国志三十六』 p242  
553 『甲斐国志二十九・三十』 p242  
554 『結駝録』 p242  
555 『土佐海統編』 p242  
556 『白山遊覽図記二』 p243  
557 『三郡雜記下』 p243  
558 『三国名勝図会』 p243  
559 『東作誌』 p243